キマグレ 第2569号 彦根東高校新聞 令和5年（2023年）9月19日（火）

福島のこれまでを知り、これからを生きる

▲大熊町出身者が被災後の家の状況や避難先での生活を語られた（写真左上）、東日本大震災・原発災害伝承館をで熱心に展示を見る学生（写真右上）、今年4月に避難指示が解除された夜ノ森駅東口側は、解除が早かった駅西側と比べるとまだ整理がついていない（写真左下）、同展示の双葉町で津波に飲まれて変形した消防車に息を飲んだ（写真右下）

彦根東高校新聞

速報新聞

キマグレ

発行所
彦根東高等学校
新聞部
彦根市金亀町4番7号

福島をつなぐ旅 2日目

9月16日～18日にかけて行われた環境省主催のイベント「福島、その先の環境へ。環境再生事業現地見学会」に本校生7名が参加した。

2日目の17日は大平山霊園、東日本大震災・原子力災害伝承館を見学し、語り部のお話しを聞いた。その後、旧避難指示区域の双葉町・大野町の町民の方にお話しをうかがった。震災当時のご経験や避難生活、この町で暮らしていこうと考えた経緯などについて語られ、学生たちは時間いっぱいインタビューを行った。スピーカーの方々は「中高生が関心を持ってくれることがありがたい。帰っても話してくれたら嬉しい」「赤裸々に経験を語ったが、地元に帰って落ち着いた今だから語れるようになった」などと述べられた。

夕方からは夜ノ森駅周辺を散策後、笑ふるタウンならはで、2日間の学びを共有し、どのように現状の課題を解決すればよいかを考えた。福島県立磐城桜が丘高校の物井佑太さんは「誰もが経験したことのない大震災を経験し、放射線についての知識がないまま町を立て直すことのご苦労がよく理解できた。震災があったというだけで終わらせるのではなく今後どう生きるかが町の活性化につながっていくと思う」と述べた。福島県立須賀川桐陽高校の有賀きらりさんは「『避難はみんなである』という言葉を聞いて、災害が起きた時に自分勝手で楽観的な想定で確信しないよう、深く考えて判断すべきだと思った」と振り返る。京都教育大学附属京都小中学校の石﨑脩也さんは「福島の人は向上心に溢れていると思った。震災は大変なことだが、震災を通して福島の人が繋がれているのだと思った」と語った。

▲双葉町長が駆け付けてくださり、本校新聞部員から彦根東高校新聞をお渡しする一幕もあった。